

## 育児支援技術修得に関する検討

### Studies on Acquiring Skill in Supporting Childcare

二村 良子\*<sup>1</sup> 大平 肇子\*<sup>2</sup> 澤井 早苗\*<sup>2</sup> 小林 文子\*<sup>2</sup> 川出富貴子\*<sup>2</sup>

**【要約】** 3年制看護課程の学生2年次生280名を対象に育児支援技術の1つである新生児の沐浴を実施させ、その技術評価を行った。すなわち、技術評価基準に従い、学生による自己評価と教員による他者評価とを行い、両者の一致度合を比較し、技術評価基準等の妥当性について検討した。

学生評価と教員評価との間には5%以下の危険率で有意な相関がみられた。また、評定尺度別学生評価と教員評価の一致率の比較では「2者択一項目」と「3者択一項目」との間には0.1%以下の危険率で有意な差がみられた。

評価方法について、評価実施時に質問を受けた群(147名)と質問を受けなかった群(133名)に分け、学生評価と教員評価の一致率を比較した。「3者択一項目」において5%以下の危険率で有意な差がみられ、質問を受けた群の一致率が高かった。

**【キーワード】** 育児支援技術, 沐浴, 評価基準, 看護技術

#### I はじめに

生後1週間以内の新生児の沐浴技術は看護実習において必須的に履修させるべき技術の1つである<sup>1)</sup>。

看護教育における、自己教育力の育成の必要性や学生の自己教育力に関する報告がいくつかされており<sup>2)3)4)</sup>、この自己教育力を育成するのに、自己評価は大きな課題のひとつであると言われる<sup>5)</sup>。

著者らは、過去に、学生に早期新生児沐浴を課題として与え、技術評価基準チェックリストを用いて学生による自己評価と教員による他者評価とを行い、その両者の評価を比較検討し、チェックリスト方式による評価が総合点において妥当であるという結果を得た<sup>6)</sup>。

本報では、さらに、学生自己評価実施時に評価基準等について質問を受けた群と質問を受けなかった群に分けて、技術評価基準チェックリストおよび評価方法の妥当性について検討を行った。

#### II 方法

対象は3年制看護課程の2年次生であり、平成2年から平成7年に沐浴技術の評価を行った者280名である。

学生には評価にいたるまでに事前学習として、手書きを渡し、課題事例のレポート、練習時のチェックリスト提出を求めた。

評価の時期は臨床看護に関する講義がすべて終了する2年次生の後期末に行った。

評価のために、学内の二槽式沐浴槽にて新生児沐浴人形を用いて実技を20分行わせた。

実技修得度評価は既報<sup>6)</sup>に示した沐浴実習評価基準24項目中19項目について行った。評価尺度はA, B, Cの3段階とした。

教員評価は沐浴指導の看護担当教員4名があたった。それぞれの教員は評価の見落としを少なくするため、異なった位置から観察した。実技終了後直ちに評価表を記入し、それぞれの教員の評価を照合した。4名の

\*1 Ryoko NIMURA : 三重県立看護短期大学,

\*2 Motoko OHIRA, Sanae SAWAI, Fumiko KOBAYASHI, Fukiko KAWADE : 三重県立看護大学

評価不一致の場合は、ビデオを再現し、評価、解釈の確認を行った。その結果4名の評価が一致したものを本報の検討材料とした。

学生の自己評価は実技終了後直ちに記入させた。学生は評価方法等について評価記入時に質問を受けなかった者（以下質問無群とする）と評価方法等について質問を受けた者（以下質問有群とする）とに分け、比較した。

### Ⅲ 成績

対象学生280名について、評価尺度A=3点、B=2点、C=1点を付与し、評価を数量化表示し、学生評価と教員評価との間の相関を求めた。表1は学生評価と教員評価の相関係数を評価基準区別に比較したものである。

評価基準について質問無群における評価基準区別学生評価と教員評価との相関係数は、「準備」は0.151、「実施」は0.415、「終了後」は0.411であり、いずれも有意な相関が認められた。また、総合点においても相関係数は0.529であり、両者評価には有意な相関が認められた。

質問有群における評価基準区別学生評価と教員評価との相関係数は、「準備」は0.277、「実施」は0.356、「終了後」は0.621であり、いずれも有意な相関が認められた。また、総合点においても相関係数は0.484であり、両者評価には有意な相関が認められた。

評価基準区別に教員評価と学生評価との一致率を算出し、表2に示した。

評価基準区分の「準備」における一致率は、質問無群で45.13%、質問有群で50.68%であり、両群間に有意な差はみられなかった。「実施」における一致率は、質問無群が55.94%、質問有群は54.40%であり両群間に有意な差はみられなかった。「終了後」における一致率は、質問無群が53.16%、質問有群が70.92%であり、1%の危険率で有意な差が認められた。「総合点」における一致率は、質問無群が54.68%、質問有群は57.26%

であり、両群間に有意な差はみられなかった。全体において、評価基準区別の「準備」における一致率は48.04%、「実施」は55.14%、「終了後」は67.23%であり、「実施」と「終了後」の間には1%の危険率で有意な差がみられた。

評定尺度は、「2者択一」、「3者択一」、「細項目のできた数による」の3種類とした。

評定尺度3種類別に教員評価と学生評価との一致率を算出し、表3に示した。

質問無群の2者択一項目の平均一致率は61.73%、質問有群のそれは63.40%であり、両群間に有意な差は

表1 評価基準区別学生評価と教員評価の相関係数

群 別	質 問 無	質 問 有	全 体
人数(人)	133	147	280
評価基準区分			
準 備	0.151*	0.277*	0.212*
実 施	0.415*	0.356*	0.406*
終 了 後	0.411*	0.621*	0.483*
総 合 点	0.529*	0.484*	0.520*
	*		P<0.05

表2 評価基準区別学生評価と教員評価の一致率の比較 (%)

群 別	質 問 無	質 問 有	全 体
人数(人)	133	147	280
評価基準区分			
準 備	45.13	50.68	48.04
実 施	55.94	54.40	55.14
終 了 後	53.16	70.92	67.23
	* ————— *		*
総 合 点	54.68	57.26	56.03
	*		P<0.01

表3 評定尺度別学生評価と教員評価の一致率の比較 (%)

群 別	質 問 無	質 問 有	全 体
人数(人)	133	147	280
評定尺度			
2 者 択 一	61.73	63.40	62.61
3 者 択 一	36.09	50.68	43.75
	* ————— *		**
細 項 目	50.63	47.62	49.05
細 項 目 外	57.46	61.28	59.46
	*		P<0.05
	**		P<0.001

みられなかった。質問無群の3者択一項目の平均一致率は36.09%であり、質問有群のそれは50.68%であり、両群間には5%の危険率で有意な差が認められた。すなわち、3者択一項目では質問を受けた方が、学生評価と教員評価の平均一致率は高くなっている。細項目のできた数による項目の一致率は質問無群では50.63%、質問有群のそれは47.62%であり、両群間に有意な差は認められなかった。

対象者全体における2者択一項目の平均一致率は62.61%、3者択一項目の平均一致率は43.75%であり、両者の間には0.1%の危険率で有意な差が認められた。また、細項目のできた数による項目の一致率は49.05%であり、細項目のない項目の平均一致率は59.46%であり、両者の間には5%の危険率で有意な差が認められた。

#### IV 考 察

看護教育では、実践力を育成することが必要なことから、看護技術の修得度の評価が行われる。その際にはチェックリストを用いて行われることが多い。また、教育用マニュアル作成後は必ず学生を対象とした実験を行い、内容を検討することが重要である<sup>7)</sup>。

本報では学生に新生児沐浴を課題として与え、技術評価基準チェックリストを用いて、学生による自己評価と教員による他者評価とを行い、その両者の評価を比較検討した。

技術学習の効果を高める目的のためには、学習の主体である学生個々が自己の技術水準をどのように認識しているかが問題となる。すなわち、教員評価と学生の自己評価とが一致して得られた場合には教育者からの指導や助言が学生の自己技術水準向上に資されることになる。これに対して教員評価と学生の自己評価が一致しない場合には、教育者側からの指導や助言がいかに正当なものであろうとも、学生は教員の評価しているような水準には自己認知していないから、学生は自己の技術水準を向上させるために資さない。

本報における観察結果、「準備」、「実施」、「終了後」、「総合点」のいずれの項目群においても自己評価と教員評価に有意な相関がみられた。したがって、技術修得の未熟の指摘はそれぞれの段階において学生に受けとめられ得るであろう。

評価における学生の自己評価と他者評価の一致率は、実施回数を重ねるにつれて高くなる<sup>8)</sup>。また、看護技術の興味の差は、学習体験の有無、技術の難易度や意義の理解度を反映している<sup>9)</sup>。したがって、沐浴技術評価についても複数回実施することで、技術評価の安定性が得られるものとする。しかし、日常生活援助技術や基本技術に対する興味は低い傾向にあり<sup>10)</sup>、自己評価がいかに重要といっても、黙って放任しておいては、生徒が自発的にそれを行うという保証がないので、教師は努めて自己評価の機会を生徒に提供し、その方法まで教えなければならない<sup>11)</sup>。さらに、よい評価方法としては、1つの評価事項に対して、いくつかの異なる評価方法を行うことである<sup>12)</sup>。

本報では、評価にいたるまでに数段階の学習課程を踏ませ、評価実施前に事例の沐浴方法についてレポートを提出させている。このレポートおよび練習結果のチェックリスト提出時に学生に対して教員は個々に指導を行っている。これらの指導段階を経ることが、学生と教員評価の一致率を高める要因となっていると考える。

評価に際して学生評価記入時に評価基準等について質問を受けた群と質問を受けなかった群との比較を行った。

本報で用いたチェックリストの評定尺度は、「2者択一」、「3者択一」、「細項目のできた数による」の3種類とした。評定尺度3種類別に学生評価と教員評価との一致率を算出したが、評定尺度構成により一致率に差がみられた。また、質問無群と有群の比較では、3者択一項目において有意な差がみられ、質問を受けた群の方が一致率は高かった。したがって、評定尺度構成の違いは一致率に何らかの影響があるものと判断し得るが、質問を受けることが学生評価と教員評価の一致率を高める一因と考察される。しかし、チェックリストのチェック項目の表現等のあいまさが指摘されているように<sup>13)</sup>、評定尺度構成については、今後検討を要するものとする。

玉木ら<sup>8)</sup>は、チェックリストを使用しての学習は、学生が自己評価の力を高め、自ら学んでいこうとする力を育成するための一方法として有効であり、相互評価後、話し合いの時間を持ち、学生は他者評価と照らしあわせてみることによって、自己を客観的に認識する力が培われると考えている。自己教育力を高めるた

めに、看護技術のチェックポイントに基づきながら自己の行動を認識させ評価する習慣が必要であり<sup>14)</sup>、チェックリストの項目がチェックされたら、学生個人の傾向が明らかになるような解釈がなされなければならないと述べられている<sup>15)</sup>。

以上のことより、育児支援技術修得度の評価の時期をずらしながら複数回実施し、それぞれに評価について解釈がなされるような話し合いの場を設けることも必要と考える。さらに、評価に先立って、育児支援技術修得度の評価基準の評定尺度構成を検討することが課題といえる。

## V 結 論

3年制看護課程の2年次生280名を対象に新生児沐浴技術評価を行った。評価には19項目のチェックリストを用い、学生の自己評価と教員評価の一致度合を比較し、6年間の比較分析を行った。各項目はA、B、Cの3段階評価を行うようになっており、それぞれに3、2、1点を付与して評価を数量化した。以下の結果を得た。

1. 学生評価と教員評価の間には「準備」、「実施」、「終了後」、「総合点」の各項目群別に5%以下の危険率で有意な相関がみられた。
2. 評定尺度別学生評価と教員評価の一致率の比較では「2者択一項目」と「3者択一項目」との間には0.1%の危険率で有意な差がみられた。また細項目のできた数による項目と細項目のない項目との間には5%の危険率で有意な差がみられた。
3. 評価方法および評価基準について質問を受けつけた群と受けつけなかった群の学生評価と教員評価の一致率には「3者択一項目」が5%の危険率で有意な差がみられた。

## 〔文 献〕

- 1) 渡部尚子：基礎看護技術のあり方(その2)母性看護技術，看護教育，32，90-94，1991。
- 2) 佐藤みつ子，他：看護学生の「自己教育力」に関

与する要因について，第22回日本看護学会集録(看護教育)，201-203，1991。

- 3) 森 千鶴，他：看護短期大学学生の自己教育力に関する研究—学年別にみた自己教育力に関するアンケートの所見—，日本看護研究学会雑誌，15(4)，24-35，1992。
- 4) 森 千鶴，他：看護態度を支える自己評価(2)—自己評価から芽生える自己教育力—，看護展望，17，805-810，1992。
- 5) 根本敬子，他：自己教育力と基礎看護技術到達度に関する検討—教員評価と学生自己評価との比較から—，第26回日本看護学会集録(看護教育)，139-141，1995。
- 6) 小林文子，他：新生児沐浴技術修得度の教員評価と学生の自己評価との比較，三重看護，13，11-14，1992。
- 7) 柏戸弘子，他：新生児沐浴マニュアルの試作と実験，第19回日本看護学会集録(看護教育)110-113，1988。
- 8) 玉木ミヨ子，他：自ら学ぶ力を育てるための教授方法の検討—チェックリストにより自己評価の力を養う—，看護教育，28，25-29，1987。
- 9) 井関智美，他：看護学生の基礎看護技術に対する学年別興味の比較，看護教育，38，123-128，1997。
- 10) 石本傳江，他：看護学科生の看護技術の興味に関する調査，新見女子短期大学紀要，15，37-54，1994。
- 11) 橋本重治：新教育法総説(下)，P. 125-152，金子書房，東京，1986。
- 12) 阿部俊子：いまアメリカの看護教育では6 学生の評価方法，看護教育，37，728-731，1996。
- 13) 松林優子：看護教育におけるチェックリスト活用についての一考察，帝京平成短期大学紀要，4，39-43，1994。
- 14) 根本敬子，他：基礎看護技術到達状況と自己教育力との関連性，帝京平成短期大学紀要，5，81-86，1995。
- 15) 宇佐美 寛：チェックリストの論理—学生の自己評価が中心である—，看護展望，5，319-324，1980。